Nagoya University Psychological Support & Research Center for Human Development
http://kokoro.nagoya-u.ac.jp/

名古屋大学心の発達支援研究実践センターニュース

編集／発行
名古屋大学心の発達支援研究実践センター
〒464-8601 名古屋市千種区不老町　TEL:052-789-2658

KOKORO

No. 9　2017年度

特集

周産期から乳児期の家族の支援

2018年1月14日～2月9日まで、オーストラリア・メルボルンより、乳幼児精神科医である Campbell Paul 先生を客員教員として招聘させていただきました。Campbell 先生は、イギリスをはじめとして乳幼児精神医学の研修を受けられ、現在では、オーストラリアだけではなく、世界の乳幼児精神保健の発展にも貢献をされている先生です。また、2年後にオーストラリア・ブリスベンで開催される世界乳幼児精神保健学会の会長を務められる予定になっており、世界の乳幼児の家族と支援のシステムを構築されているトップリーダーの一人です。今回は、Campbell 先生の1か月の滞在中の活動を通して、周産期から乳児期早期の家族の支援の在り方を取り上げます。

1. Paul 氏について

Paul 先生は、メルボルン王立小児病院の精神科に所属し、0歳～4歳までの乳幼児のグループのチームリーダーです。メルボルン大学の精神科の乳幼児精神保健のコースの立ち上げにも関わり、准教授として教鞭にもたたれています。彼の研究の一つのテーマは、病気の赤ちゃんと家族の支援です。自分の子どもが病気を持って生まれてくること、また病気となることは、家族にとって大きなトラウマとなり、また子ども自身、未熟な状態であったり、疾患を持っていたりするために、親の養育行動を引き出すことがなかなか難しく、親子の関係性が育っていく過程は、通常のプロセスに比べて困難を伴います。メルボルンの王立小児病院では、精神科の乳幼児のチームが、新生児集中治療室（Neonatal Intensive Care Unit; NICU）および小児救急病棟（Pediatrics Intensive Care Unit; PICU）に関わり、病棟を定期的にラウンドしながら、子どもと家族のケアに直接携わるとともに、スタッフとカンファレンスを行うことで協働して治療にあたっています。そこで介入の手段の一つとして活用されているのが新生児行動観察（newborn behavior observation system: NBO）です。今回の招聘は、NBO の日本での活用の可能性を探ること、また NBO に関連した共同研究をすすめていくために行われたものでした。

写真1　Paul 先生ご夫妻と

2. NBO とは？

NBO は、ブラゼルトン新生児行動評価（Neonatal behavior assessment scale: NBAS）を家族関係の支援に焦点を当てて、項目数を減らし、家族と赤ちゃんを観察するということに焦点を当てて開発されたものです。NBAS は、30年ほど前に、開発者のブラゼルトン先生が文化比較のために長崎の五島列島を訪問し、共同研究を開始したことをきっかけに、日本に紹介されました。その後、長崎大学のグループ（小児科、小児外科、PT など）が NBAS の研究会を立ち上げ、その普及に尽力を尽くしてきました。NBAS は、7つのクラスターからなり、新生児～3か月までの赤ちゃんの最大限の能力を引き出し評価をするものです。睡眠時に刺激をいかにシャットダウンできるかという漸減反応、人の顔や声、そして赤色にどれだけ興味を寄せ、反応することができるかという方位反応、手足の動きや筋緊張をみることで運動系の成熟度をみるもの、刺激への過敏性やステートのコントロールの力を見る状態の組織化、自分の力でどれだけ安定をすることができるかという自己調整の力、ストレスがどの程度現れやすいかといった自律系の項目となど、ガラガラやベルなど道具を使いながら実際の赤ちゃんを扱いながら評価をしていくものです。センター教員の永田は、20年前に資格を取得し、NICU の退院前の赤

ちゃんに実施し、フォローアップ研究に携わってきました。また10年前にはトレーナーの資格も取得し、日本国内でのNBASの有資格者の養成に携わっています。

しかし、もともとは神経学的な予後を予測するものとして開発されたという経緯や、検査という性格上、項目数が多く、また評価も細かいこと、実施する際には、赤ちゃんの状態（ミルク時間や処置など）にあわせて調整する必要があるなど、日常的に実施するにはハードルがやや高いものでした。また赤ちゃんに対してやや侵襲的な刺激を与える場面もあるため、家族同席で行った場合は、家族の不安を高めることもあることが指摘されていました。そこで、赤ちゃんの力を感じてもらえるような項目を中心に、項目数をかなり減らすとともに、検査者が赤ちゃんの評価をするものではなく、家族と一緒に赤ちゃんを観察し、実施を通して、赤ちゃんの力を家族に見つけ出してもらうツールとして開発されたのがNBOです。2008年に、日本で世界乳幼児精神保健学会が開催されたときに、NBOの開発者でもあるKevin Nugent先生を名古屋大学にお招きし、講演会を開催した時に、NBOの紹介をしていただきました。それから、10年の間に、世界各国で、新生児から乳児期早期の支援の有効なツールとして、家庭訪問などに導入されるようになってきており、産後うつ病の改善、母親の感受性の増加などのエビデンスが積み重ねられてきています。

3. 新生児集中治療室での親子関係での支援

今回の招聘の一つの大きな目的の一つが、低出生体重児や病気を持って生まれてきた子ども達が入院となってくる新生児集中治療室（NICU）での親子関係への効果的な支援の在り方の検討です。名古屋大学医学部附属病院の周産母子センターの医師とミーティングを開催するとともにNICUを訪問し、家族とスタッフ同席のもと、NBOとその振り返りを行いました。一人の赤ちゃんは、修正在胎23週の超低出生体重児で、生後半年程経過していましたが、状態が安定せず、実施時にようやく体重が2300 g台まで増えてきた状況でした。これまで厳しい状態が続いていたこともあり、予定日から換算する修正月齢で3か月を過ぎてきていましたが、反応が弱く、お母さん自身が、「ちゃんと目が見えているのか」「私がわかっているのか」「反応がとても乏しい気がする」と赤ちゃんの反応や、かかわり、そしてその後の発達にとても不安を抱えてみえました。家族の調子が悪く、お母さんに同席してもらうことはかないませんでしたが、プライマリーナースや主治医の同席のもと、NBOを使って、今、この赤ちゃんがどんな力をもっているのかをPaul先生と一緒に観察をさせていただきました。まだ反応は弱いものの、穏やかにゆっくり声をかけていくと、わずかながら反応を示し、おしゃぶりを吸わせてあげて、手足のコントロールを助け、安定化を助けてあげることで、よりよい反応を引き出すことが可能であることがわかりました。すでに修正月齢でも3か月が過ぎており、比較的遠くまで見えている様子が観察されたこと、少し起き上がらせてあげることで周囲に興味を示したこと、手を握ったり、足の裏を支えてあげると本人が落ち着くことがみえてきました。そのあと、両親の面会のときに、NBOのフィードバックを赤ちゃんを一緒に見ながら行いました。お母さんに抱っこされていた赤ちゃんは、目を開け、きょろきょろして安定した状態でした。Paul先生は、ゆっくり赤ちゃんに会い、そしてお母さん、お父さんに声をかけ、お母さんお父さんが感じている赤ちゃんについて教えてもらいながら、赤ちゃんにも声をかけ、まるで家族と赤ちゃんとPaul先生が響き合うような形でフィードバックをしていきました。抱っこの仕方、あやし方など、その中でお母さんが自然と変え始め、今まで笑ったところを見たことがないと言われていた赤ちゃんが、自然な素敵な笑顔を見せ、お母さんの顔をしっかり見つめ、はっきりとした反応を返してくれました。お母さんは涙を流され、また一緒にいたスタッフも、自然と、赤ちゃんにあわせて穏やかなトーンでのケアを行うようになっており、まるでそこには不思議な空間が生まれていました。1か月後に再度、家族同席でNBOを実施しましたが、私たちも驚くぐらい赤ちゃんの反応性がよくなり、よく笑うようになっていました。まだお母さんは不安を語られていましたが、お母さんなりに「寂しがり屋で遊んでほしいという要求を伝えてくれる子」というはっきりとした赤ちゃんのイメージがつかめるようになっており、「前回のセッションの後、病気の赤ちゃんとしてではなく、我が子として会えるようになった。私自身が一番変わって、この子にアンテナを張って安心して会えるようになってから、この子も変わってきたような気がする」と語ってくれました。

Paul先生は、現在、NICUでの介入研究をRCTで開始されており、日本でもNBOをつかった介入研究がこれから開始される予定になっています。

写真2　NICUでのセッションの様子

4. 県内の施設の訪問

愛知県内の二施設を滞在中に訪問しました。豊田市こども発達センターでは、日本とオーストラリアの早期からの発達支援システムについてのディスカッションを行いました。豊田市こども発達センターはワンストップサービスを行い、センターで地域もふくめた支援を一貫して行うことで、家族にまずは子どもを知ってもらうこと、親としての自信をつけてもらってから診断を行い、地域と連携しながらライフステージに合わせた支援をおこなっていることの説明をうけました。一方、オーストラリアでは、いろいろな支援や介入法が確立されているものの、親が選択し、その機関に通うものとなっているため、子どもと家族全体を見据えた支援をおこなっていくことが難しいという話がありました。ただ、子どもを主体とした支援を行い、家族が子どもの一番の専門家としてどう育ってもらうのかというところが一番大事な土台となることを確認する機会となり、病気や障害を持って生まれてきた子どもと家族の支援の在り方について貴重なディスカッションをする機会となりました。

あいち小児保健総合医療センターでは、PICU、心療科病棟、NICU を見学させてもらい、それぞれのスタッフとミーティングを行いました。愛知県ではじめて昨年設置された PICU では、生命的予後が厳しい子どもの治療をどこまでするのかという厳しい判断が求められることが多く、スタッフ間、専門とする領域によっても考え方が異なること、そうした中、多職種連携をどう行い、家族の支援を行っていくのかということが話題に上がりました。オーストラリアでは、Paul 先生をはじめとしてメンタルヘルス部門のスタッフが日常的に、PICU の中をラウンドし、気軽に相談できる雰囲気を作っており、何かあって相談するということは、刻一刻とかわる集中治療室ではオンタイムでは対応できないことから、スタッフの一人としてメンタルヘルスの専門家がかかわることの重要性を改めて確認するものとなりました。また、NICU では、状態が厳しく、半年近くの鎮静を徐々にとくことができ、覚醒する時間が増えてきた生後半年をすぎた赤ちゃんについてケースカンファレンスを行いました。最近になってようやく状態が安定してきた状況で、これまで触ることも悪化を防ぐために制限されていたために、家族も、赤ちゃんとのかかわりに慎重になりすぎていて、どう発達を支援し、家族の関わりを後押しすることができるのかということについて、新生児科医、産科医、助産師、NICUNs、PT、臨床心理士を交えてディスカッションを行いました。そのあと、母親が面会しているところに Paul 先生が話しかけ、赤ちゃんと会ってもらったところ、Paul 先生に引き出されるように赤ちゃんが反応をしっかり示し、それを見たお母さんの表情が変わっていくという姿が見られました。私たち専門家がまずは赤ちゃん(子ども)にきちんと出会うこと、赤ちゃんにあわせたかかわりを丁寧に行うことで、赤ちゃんの反応を引き出し、それを家族と共有することで、赤ちゃんの発達と家族としての発達を支えていくことの大事さを改めて再認識させてもらう機会となりました。そのあと、児童精神科医、臨床心理士とともに、リエゾンとしての介入のあり方についてミーティングを行いました。日本において小児のリエゾンは始まったばかりで、昨年、日本小児精神神経学会が小児リエゾンのガイドラインを発行したという段階です。今後、ますます重要な分野となっていくとともに、介入のエビデンスを積み重ねていくことが求められているといえるでしょう。

写真3　愛知小児保健医療総合センターのスタッフと

おわりに

Paul 先生は1か月の滞在でしたが、様々な職種や機関とのディスカッションをおこなう機会に恵まれました。産後の本当にシステマティックに親子関係が変わりうる時期に介入をすることで、親のメンタルヘルスの悪化や母子の関係性の問題の予防になることを繰り返し強調されました。今後、日本の社会や文化に合わせた支援をどうおこなっていけばいいのか、またそのシステムをどう構築していけばいいのか、多職種との話し合いの中で検討を続けていきたいと思っています。

Message
ポール先生からのメッセージ

私たちは名古屋で、多くの人と一緒に仕事ができ、すばらしい時を過ごすことができました。訪問期間中、様々なクリニックや新生児の集中治療室を訪問し、多職種でディスカッションできたことは本当にたくさんのことを得る機会となりました。特に名古屋大学附属病院の周産母子センターで超低出生体重児の赤ちゃんとその家族と出会い、何度かセッションを共有したことは、私自身の研究や仕事をすすめるうえで、早期介入の方法を考える重要なインパクトをもたらしました。新生児行動評価（NBO）というツールを通じて、どういった支援が可能で、どのような効果をもたらすのか、NICU に入院している赤ちゃんや、病気の赤ちゃんと家族への支援の在り方について、これからも連携し、共同研究を進めていきたいと思っています。

The Baby as Subject　— Paul 先生の講義 —

Paul 先生には、5回の講義を開講していただきました。1回目、2回目は乳幼児精神保健の概説を、3回目～5回目は、NBO についての講義です。この講義は、1～2回目は一般公開で行いました。また4回目は医学部保健学科のある大幸キャンパスで開講し、助産師、NICU 看護師、リハビリスタッフが参加しての講義となりました。周産期～乳児期にかけての親子関係の介入の大切さや、赤ちゃんを主体として、支援をしてくことのポイントを、たくさんのビデオクリップで、臨床の介入場面を紹介いただきながら解説をいただきました。

写真1　教育学部での講義

写真2　保健学科での講義

講義に参加して

Paul 先生のご講義は、赤ちゃんの力、ご家族の力を強く感じられる大変興味深いものでした。私は、ハイリスクの赤ちゃんとお母さんが関わるビデオ映像が特に印象に残っています。映像では、赤ちゃんの反応を読み取り、その反応に合わせてお母さんが反応を返すやり取りの中で、赤ちゃんとお母さんの生き生きとした表情がみられました。このように、言葉を使った説明だけではなく、映像での体験的な感覚を通して、赤ちゃんとお母さんの関係性構築の大切さを学ぶことができました。5回にわたるご講義で Paul 先生は、乳児や母子に関する理論などの基礎的な知識から、臨床現場での実践的な介入や支援や最新の研究についてまで幅広く教えてくださり、大変有意義なものになりました。今後の実践に活かしていきたいと思っています。

教育発達科学研究科 D3　**浦田有香**

第３回日本周産期精神保健研究会
（日本周産期精神保健研究会の報告）

永田雅子教授が会長として、第3回日本周産期精神保健研究会を開催しました。準備委員会には名古屋大学医学部附属病院産婦人科、新生児科、小児科、親と子の心療部の教員の他、医学部保健学科教員など、名古屋大学の多領域の専門職が集まり、準備を進めてきました。

第3回日本周産期精神保健研究会ポスター

写真1　会場内の様子

写真2　野田氏の対談

当日は、380名の参加があり、周産期医療にかかわる多職種が一同に集い、ディスカッションが繰り広げられました。1日目は、主に妊娠中から新生児集中治療室退院前までの支援に焦点が当てられ、多職種による仮想事例をめぐるシンポジウムや、センターの客員教員である Paul 氏による特別講演が行われました。シンポジウムで Paul 氏が発言した「赤ちゃんの物語では、どんな体験となるのだろうか」という言葉は、会場内に静かに、そして大きなインパクトを与えていました。2日目は、地域との連携に焦点が当てられました。医療ケアが必要であったり、家族が社会的リスクを抱えている場合の連携のあり方について一般演題やラウンドテーブルで議論が繰り広げられました。そして、特別企画では衆議院議員であり総務大臣の野田聖子氏が登壇され、中京テレビアナウンサー前田麻衣子氏との対談が行われました。不妊治療を経ての子どもの出産、NICU の長期入院、医療ケア児としての小学校入学までの道のりを、涙あり、笑いありのトークが行われ、周産期医療関係者に向けて、様々な家族の形があること、医療ケア児を地域で見ていくことの大変さがまだあること、そしてこれから私たちが考えていかなければならないことが伝えられました。そして最後のパネルディスカッションでは、妊娠期の胎児診断からボンディングの問題、そして在宅移行の支援まで、産科医、精神科医、小児科医、臨床心理士それぞれの立場から講演が行われ、フロアとのディスカッションが行われました。多職種が同じ立場、同じ土俵で議論をする場はまだまだ限られています。家族と赤ちゃんの支援を複合的に考えていくこうした機会を積み重ねていくことが次のステップにつながっていくのではないでしょうか。

国際共同研究 モンゴルプロジェクト 2017年度活動報告

モンゴル国における発達障害児支援研究

2013年から始まったモンゴル国における発達障害児支援研究は、昨年度開設された「名古屋大学モンゴル国立教育大学子ども発達共同支援センター」を中心に、順調に事業が進展しています。

1,「名古屋大学モンゴル国立教育大学子ども発達共同支援センター」開所1周年記念シンポジウム

モンゴル国における発達障害児支援研究の中核的な施設として、2016年9月に、モンゴル国立教育大学内に、「名古屋大学モンゴル国立教育大学子ども発達共同支援センター」が開設されています。

2017年6月に、同センター開所1周年記念シンポジウムが、モンゴル国立教育大学で開催されました。本学から、松尾清一総長、磯田文雄アジアサテライトキャンパス学院長、金井篤子心の発達支援研究実践センター長、モンゴル国立教育大学から、ムンフジャルガル学長、マンダホ教員養成学部長等の御臨席のもと、政府関係者、現地の大学および特別支援学校教員約100名が参加しました。

シンポジウムでは、心の発達支援研究実践センターの野邑健二特任教授およびモンゴル国立教育大学のオドゲレル講師による、センターにおけるこの1年間の活動や研究成果の発表がありました。

またシンポジウム後には、子ども発達共同支援センター主催の研修会が開催され、本学からは、心の発達支援研究実践センターの金子一史准教授および若林紀乃研究員が講演しました。

2, 田中ビネー知能検査モンゴル版開発

モンゴル国には、子どもの発達を評価する知能検査がありません。このために、個々の子どもに対する客観的なアセスメントに基づいた支援が困難となっています。

こうした状況を受けて、我々は原著者である田中教育研究所より許可を受けて、田中ビネー知能検査Ⅴのモンゴル版を開発しています。本開発事業には、JICA 委託事業からも協力を得ています。

2017年度は、原版をモンゴル語に翻訳した検査問題をもとに、モンゴルの文化や教育に合った検査問題を作成しました。その後、1－16歳の一般の子どもたちに協力して頂いて、実際に検査を行って結果を分析する予備調査を行いました。予備調査は、6月に68人（首都ウランバートル）、11月に320人（ウランバートルおよびアルハンガイ県郊外）の子どもたちを対象に、実施しています。

調査に先だって、モンゴル人専門家（大学教員、学校教員、医療・心理関係者等）に対する検査者研修会を実施し、十分な技術と経験を得て頂いた検査者が学校に出向いて検査を行いました。

今後、予備調査の結果をもとに問題の修正を行い、2018年度には800人への調査を実施して標準化を行い、モンゴル国で広く使われる検査を発刊できるよう開発を進めていく予定です。

3, モンゴル国における子どもの発達やこころの問題に対する相談活動

前年度に引き続き、モンゴル国の子どもとその家族、支援者に対する相談活動を行っています。相談は、本学スタッフとモンゴル国立教育大学教員とが協働で行っています。

名古屋大学モンゴル国立教育大学子ども発達共同支援センターでは、こうした活動を通して、モンゴル国における専門家への教育、人材育成、地域貢献を行っています。

地域貢献事業開催　苦戦する青年を育てる地域づくり
ー大学をプラットフォームとして産官学地域をつなぐー

2017年12月25日に、プロジェクトNU MIRAIの周年行事の一環として、学生相談総合センター主催による地域貢献事業「苦戦する青年を育てる地域づくり－大学をプラットフォームとして産官学地域をつなぐ－」が、ＥＳ総合館ＥＳホール他において開催されました。心の発達支援研究実践センターからは、学生相談総合センター長を兼任しているこころと社会のつながり分野の松本真理子教授、学生相談総合センター学生相談部門の専任相談員として従事しているこころの支援実践分野の鈴木健一教授が登壇しました。

当日は165名の参加がありました。大学関係者は、東海地方だけでなく遠方の大学も含め26大学から40名を越える関係者が参加しました。地域一般住民の方や、高校や教育委員会などの教育機関、地域の企業、病院などからも参加がありました。

午前のシンポジウムでは、学生相談総合センターの各部門・室の代表者4名がシンポジストとして登壇しました。このうち、学生相談部門の報告は、学生相談部門の専任相談員である鈴木教授が行いました。学生相談部門では、コミュニケーションが苦手であったり対人緊張が強かったり、他大学から進学したために友だちがなかなか作れなかったり等といった学生たちを対象として、個別心理面接に加えて、ボードゲームをしながら、心の成長を育んでいくグループ活動「ゲームの会」が行われています。鈴木教授から、「ゲームの会」の活動が、コミュニケーションが苦手な学生にとっては、対人関係を練習する場として機能し、友だちが作れない学生にとっては、同好会のような場として機能し、引きこもっていた学生にとっては、研究室や大学生活へ戻る前段階の場として機能していることが報告されました。

午後の分科会では、研究室における大学院生への予防的心理支援の実践や、ピア・サポート活動について、実践報告がなされました。地域基幹大学として、苦戦する青年をいかに支援し育成するかといった課題に対して、学生相談総合センターの包括的な学生支援実践・研究が報告された有意義な一日でした。

退職のあいさつ

准教授

五十嵐哲也

平成30年3月をもって、心の発達支援研究実践センターを退職することとなりました。2年間という大変短い間の在籍期間となり、何かを成し遂げられたという思いを得るに至らず、心許ないばかりです。しかしながら、この間、センターをはじめ、関係各部局の先生方や職員の皆様、学生の方々には大変お世話になり、感謝の思いしかありません。皆様からの多大なるサポートを実感しながら、名古屋大学での教員生活を過ごすことができたことに対し、とてもうれしい思いでいっぱいです。

思い返せば、着任当初のセンターニュースにおいては、私の専門である学校心理学について、私自身の経験も紹介しながら、「学校での支援の実践と、それらの理論的基盤となる研究に対して一定の枠組みを与え、その発展を支える学問である」という趣旨のことを述べさせていただきました。学校という社会において発生している多様な心の健康課題について、どのような支援策を見出すことができるかに主眼を置いたこの学問は、「こころと社会のつながり」をよく表現した領域であるように感じています。つまり、学校での心理的支援は、「個々の子どもの心理的背景」にのみ目を配っているだけでは、十分ではありません。「その子の周りにいる子どもや大人との相互作用」や、「置かれている地域環境」などの多種多様な理解を深め、「誰が」「どのように」「誰に対して」支援するかを明確にしなければ、課題解決に至る最適な支援策が見出せないと言うことができます。そのような視点の重要性は、わずかな期間ではありましたが、名古屋大学の学生の皆様とともに学ぶことができたかと思います。

国家資格化に伴って、今後の心理職のあり方が問われている中、心理職を目指そうとする学生にとって、最も身近な心理職はスクールカウンセラーかもしれません。学校心理学の視点の重要性を兼ね備えたスクールカウンセラーが、今後も名古屋大学から巣立っていくことを願っています。そして、それらの支援実践の理論的基盤となる研究が、本センターを中心にさらなる発展を遂げることもお祈り申し上げます。さらには、センターでの臨床実践と、そこから得られる知の蓄積がいっそう深まり、目の前にいる子どもたちが健やかに成長していくことも願ってやみません。そのような多くの願いをもって、退職のあいさつに代えさせていただきます。本当にありがとうございました。

活動報告

レクチャー

テーマ：認知行動療法

講　師：David J. Kutz, Ph.D.
ニューメキシコ大学医学部臨床准教授、
Private Practice, Clinical Psychologist (Santa Fe)

日　時：①8月1日13:00-14:30 Basics of CBT
②8月1日14:45-16:15 OCD
③8月2日13:00-14:30 Generalized Anxiety
④8月2日14:45-16:15 Eating Disorders
(Anorexia & Bulimia)

場　所：名古屋大学教育学部Ｅ演習室（東山キャンパス）

テーマ：The Baby as Subject: an Introduction to Infant Mental Health and the Newborn Behavioural Observation

講　師：客員教授
Associate Prof Campbell Paul, Consultant Infant Psychiatrist, the Royal Children's Hospital, the Royal Women's Hospital and the University of Melbourne, Australia

1）Tuesday, January 23　16:30～18:00
名古屋大学（東山 Higashiyama キャンパス）
文系総合館（AdministractiveOffice Humaninities and Social Sciences room #311）311号教室
title: The Baby as a Person, Showing Initiative from the Beginning: an Introduction to Infant Mental Health.

2）Thursday January 25　16:30～18:00
教育学部第3講義室 Education Lecture room 3
title: Mental Health Interventions with the Sick Baby and Troubled Parents: a role for all Health Professionals Working with Infants

3）Thursday February 1　16:30～18:00
教育学部第3講義室 Education Lecture room 3
title: Introducing the Newborn Behavioural Observation (NBO): Key Principles underpinning our Understanding the Newborn Infant and their Family Relationships

4）Tuesday February 6　16:30～18:00
大幸（Daiko）キャンパス　本館1F　WB 講義室
title: The Amazing Newborn Baby: How to Use the Newborn Behavioural Observation (NBO) to Meet the Baby and Support the Emerging Infant- Parent Relationship

5）Thursday February 8　16:30～18:00
教育学部第3講義室 Education Lecture room 3
title: The Newborn Behavioural Observation (NBO) as a Timely Intervention with Sick and Vulnerable Infants and Families; from the Maternity Unit, Neonatal Intensive Care Unit to Family Home

名古屋大学モンゴル国立教育大学子ども発達共同支援センター記念式典」

日　時：6月7日
場　所：モンゴル国立教育大学
参加者：松尾清一総長、金井篤子心の発達支援研究実践センター長（名古屋大学）、Munkhjargal 学長、Mandakh 教員養成学部長（モンゴル国立教育大学）他
発表者：モンゴル国立教育大学：D. Odgerel (lecture, MNUE), B. Myagmarjaw (lecture, MNUE), D. Bayar (Principal, "Ui Tsai" private school)
名古屋大学：野邑健二特任教授、金子一史准教授、若林紀乃研究員（心の発達支援研究実践センター）

脳とこころの研究センタープログレスレポート会議

The Brain & Mind Research Center Progress Report Meeting

日　時：平成29年12月14日　18：15–19：45
Time & Date：18:15–19:45　December 14, 2017
開催場所：名古屋大学・東山キャンパス・教育学部2階大講義室
Venue：Large Lecture Room, Second floor, Graduate School of Education and Human Development, Higashiyama-Campus, Nagoya University

【司会・コーディネーター】
大平 英樹 先生　名古屋大学大学院環境学研究科
Dr. Hideki Ohira (Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University)
金子 一史 先生　名古屋大学心の発達支援研究実践センター
Dr. Hitoshi Kaneko (Psychological Support and Research Center for Human Development, Nagoya University)

【発表】
1. 大坪 庸介　神戸大学大学院人文学研究科
孤独感とコミットメント・シグナルへの感受性―孤独な人は絆を感じにくいのか？
"Loneliness and Sensitivity to Commitment Signals: Are Lonely Individuals Insensitive to the Presence of Interpersonal Bonds?"
Dr. Yohsuke Ohtsubo (Graduate School of Humanities, Kobe University)

2. 中野 まみ　名古屋大学大学院　教育発達科学研究科
ボンディング障害のリスク要因ー妊娠時から産後3か月までの縦断研究ー
"Risk factors for impaired maternal bonding when infants are 3months old: a longitudinal population based study from Japan"
Mami Nakano, M. A. (Graduate School of Education and Human Development Nagoya University)

2018年度 招聘教員

Richard N. Shadick（リチャード・N・シャディック）
ペース大学カウンセリングセンター長（アメリカ合衆国）
研究テーマ：大学生に対する自死予防と事後対応
招聘期間：平成30年8月7日～平成30年8月31日

スタッフ紹介

■センター長

金井篤子
教授・産業臨床心理学・
キャリア心理学
●研究テーマ：
・働く人のキャリアとメンタルヘルスに関する研究
・キャリアカウンセリング
・ワーク・ライフ・バランス

■こころの育ちと家族分野

永田雅子
教授・発達臨床心理学
●研究テーマ：
・周産期の母子支援
・発達障害の早期介入
・乳幼児精神保健

金子一史
准教授･発達臨床学、臨床心理学
●研究テーマ：
・産後うつ病および産後愛着障害への介入
・児童期のメンタルヘルスに関する日本とフィンランドとの国際比較研究

■こころと社会のつながり分野

松本真理子
教授・臨床心理学
●研究テーマ：
・子どものメンタルヘルス支援に関する国際比較と心理教育プログラム開発
・子どもの心理アセスメント

五十嵐哲也
准教授・学校心理学
●研究テーマ：
・不登校の予防的支援に関する研究
・学校環境と子どものマッチングに関する研究
・学校適応に関与する子ども自身の力に関する研究

■こころの支援実践分野

鈴木健一
教授・臨床心理学、精神分析
●研究テーマ：
・学生相談における対人関係精神分析の援用

杉岡正典
准教授・学生相談
●研究テーマ：
・大学生への心理的援助
・地域援助、コミュニティ心理学

■発達障害児支援研究プロジェクト

野邑健二
特任教授・児童精神医学
●研究テーマ：
・発達障害の臨床
・乳幼児の発達支援
・発達障害児の家族のメンタルヘルス

福元理英
特任助教・臨床心理学
●研究テーマ：
・発達障害の臨床
・特別支援教育における心理士の専門性についての検討

若林紀乃
研究員・発達心理学、保育学
●研究テーマ：
・子どもの社会性の発達
・保育者・教育者の協働
・発達障害のある子の育ちと教育

KOKORO
名古屋大学心の発達支援
研究実践センターニュース
NO.9・2017年度

●編集後記

本センターが改組し、新たに3分野1プロジェクトから成る心の発達支援研究実践センターとなって3年が経とうとしています。

本号では、こころの育ちと家族分野における周産期と乳児期の家族支援の実践と国際交流の報告を特集しました。また発達障害児支援プロジェクトからは、5年目になるモンゴルにおける発達障害児支援の共同研究・事業の経過報告を掲載しています。そしてこころの支援実践分野からは、学生相談総合センターにおける地域貢献事業「苦戦する青年を支える地域づくり」の報告を掲載しました。

小さな所帯のセンターですが、今年度も、学内外はもとより海外においてもスタッフ一同、心の健康に貢献している現状をご紹介できたのではないかと思っております。

センターに対してご意見、ご要望などいただけますと幸いです。　M.M.　記